



# ARIMASS Letter

[ Association for Risk Management System

危機管理システム研究学会 2001年12月  
第7号

## 2002年当研究学会の役割は益々重要に

危機管理システム研究学会常任理事  
島田 公一（あいおい損害保険）

2000年4月22日に誕生した当研究学会も、早1年8ヶ月が経過しました。

この間、「Y乳業食中毒事件」、「Bタイヤ米国子会社のリコール事件」、「M自動車リコール隠し事件」、「えひめ丸の沈没事故」、「新宿雑居ビル火災」、「米国同時多発テロ」、「狂牛病事件」など新たな多くの災害や事件が発生しました。

いずれも社会的に大きな出来事ですが、とくに米国同時多発テロは莫大な被害をもたらしたのみならず、世界を報復テロの恐怖へと陥れ、その後も各国各方面に多大な影響を与えています。こうした災害や事件が発生するたびに、危機管理・リスクマネジメントという言葉がマスコミを賑わし脚光を浴びていますが、多くの企業ではまだまだ個別事象に対する後追いの対策を検討しているに過ぎないのが実態です。

社団法人在外企業協会が2001年5月に165社を対象に行ったアンケートでは、「専任組織あり」は18.8%で、2年前調査に比べ4.3%減少しており、その原因は不況によって「カネを稼がない組織」が縮小される傾向にあるためとなっています（日経ビジネス2001年10月29日号）。

また日経新聞が行なった社長100人のアンケート結果(2001年12月6日)では、テロを受けて国内危機対策にも力を入れ、海外出張自粛(82.5%)、「郵便物の厳重チェック」(63.1%)、ビル入退館厳重管理(48.5%)を実施し、3分の1の企業が「危機管理関連マニュアルの作成」を挙げています。

しかしながら、危機管理専門組織の設置等まで取り組んでいる企業はほとんどみられません。21世紀を迎え、予期せぬ新たなリスクや危機が次々と現実のものとなっている現状をみると、個人、企業、社会のあらゆるレベルにおけるリスク感性を研くことが益々重要となっているといえます。

当研究学会では、出現するリスク・危機の研究はもとより、社会的啓発、社会的リスク感性教育への取り組み柱の一つとして掲げています。

当研究学会はまだまだ駆け出しの段階ではありますが、こうした状況の中で、2002年を迎えるにあたり、当研究学会の社会に対する役割は一層重要性を増していると言えます。

目	次
2002年当研究学会の役割は益々重要に.....	1 分科会報告 .....2・3
第2回年次大会開催予告.....	2 事務局からのお知らせ..... 4

## 危機管理システム研究学会第2回年次大会開催予告

危機管理システム研究学会第2回年次大会は2002年5月25日(土)に桜美林大学において開催することに決定いたしました。プログラム等については次回の会報8号(2002年3月発行予定)に掲載いたしますので、会員の皆様の、積極的な参加、熱心なる討議を心よりお待ちしております。皆様ご予定を調整されご出席をお願いいたします。

\*\*\*\*\*  
\*\*

### 分 科 会 報 告

#### 【危機管理教育実践分科会】

世話人：常任理事 後藤 和廣(三井海上基礎研究所)

<活動報告>

##### 1. 横浜市立大学の総合講義に講師派遣

当学会では横浜市立大学と提携し総合講義の支援を行った。この講義は、全15回の講演に各界から講師を招聘し行われたが、当学会から推薦した村上處直氏、指田朝久氏、本位田正平氏、野村修也氏、後藤和廣の5名が講師として参加した。また辻純一郎氏が医学部の総合講座で講演した。総合講座は、9月から約半年間開講され、専門分野に囚われず広い観点から、問題・課題を観察・分析できるようにとの視点からもうけられている。出席者からは「もう少し深く勉強したい」などの意見も聞かれ好評を博した。

##### 2. 国際学術シンポジウムの後援実施

横浜市等が主催し、神奈川県等が後援するシンポジウム「沿岸大都市の危機管理と21世紀世界発展ビジョン」の後援団体の1つとして当学会が参加した。このシンポジウムにはパネル討論の講演者として樋口修一郎氏が参加する。

##### 3. ARM資格の調査

ARM(Associate in Risk Management)は、アメリカのリスクマネジメントの資格ですが、この資格のための教育内容等の調査を開始した。

##### 4. 当学会会員の勉強会の支援

当学会会員である高木利勝氏が9月にセミナーを開催したが、このセミナーに講師を出し支援した。また和泉太郎氏が世話役となった勉強会の開催にも協力した。

#### 【リスクマネジメント・システム研究分科会】

世話人：常任理事 指田 朝久(東京海上リスクコンサルティング)

<第8回研究会報告>

1. 開催日時 9月26日 木曜日 18時30分から、日新火災海上保険本店 会議室

2. 出席者(14名)：樋口、長井、北澤、小澤、藪、坂、吉川、池内、山口、五島、横井、村上、松本、指田(順不同)

今回の討議はまず9月11日に発生した米国の同時テロ事件について企業の危機管理としてどのような考えができるのかについて意見交換を行いました。日本国内の企業として今後は特定するリスクについてテロを加

える必要がある。また、多くの人材を喪失した企業は今後人材の確保が課題となるが、米国は転職市場があるため日本よりまだ対応が可能であろう。1993年の爆破事故でも同様であったが、業務復旧計画を持っていた企業が多く、情報システムや事務所のバックアップサービスを活用している。など活発な議論が交わされました。

規格の検討については、2001年10月に用語についてISOで正式に認められたとの話題提供に加え、リスク算定やリスク評価について議論しました。リスクの優先順位の決定では経営者の方針はリスク基準で反映するしかない、また特に対応しないリスクを明示することが重要である、などの意見が出されました。

今回は11月21日水曜日18時30分から場所は日立製作所本社（お茶の水）です。

## オピニオン

何でもありの時代、予期せぬ事が起きるのは日常茶飯事なのかも知れない。全世界を巻き込む深刻な事態か

ら自分だけが恥をかく程度のもので。格調と気さくさにあふれた研究会は新入りを温かく迎えてくれた。興味深いテーマをざっくばらんに話し合える雰囲気には驚きと安らぎを感じながら自分も参加したいという思いにかられ、あつという間の2時間半。もっと早く参加すればよかったと思った矢先「感想文!!」のご指名に「ドキッ!!」、仲間入りの登龍門なのだ和我が身を励ますことにした。現実となってしまったトム・クランシーの奇想天外なストーリー、次作が気にかかる。

会員 山口 泰正（伊藤忠商事(株)総務部社会対応チーム）

狂牛病・新宿歌舞伎町でのビル火災など、リスクマネジメントの重要性を痛感させられる事件が多発していた矢先の米国同時多発テロ。あらためて、日本企業も世界を見据えたグローバルなリスク感度を持つ必要性を感じたものである。当研究会では、メンバー各位から、この一連の事件につき、様々な視点からの情報・意見・今後の対策案などが出され、大変有意義な場となっている。

「リスク」を扱う職業人として、将来の平和に向けより多くの教訓を学び取り、「喉元過ぎれば熱さ忘れる」にならないよう、今後も研鑽に努めたい。

会員 横井 靖（日新火災海上保険株式会社リスクマネジメント部）

### <第9回研究会報告>

1.開催日時：11月21日水曜日18時30分から21時、日立製作所本社

出席者（15名）：樋口、長井、北澤、小澤、藪、坂、吉川、多田、山口、横井、村上、野村、中山、竹中、指田（順不同）

今回の規格の検討ではリスクマネジメントの目標およびリスク対策の選択について議論しました。リスクマネジメントの目標ではリスク毎に目標を立てることになるが、数値化しにくいものは目指すべきランクで良いのではないか、また重要なのは文章として皆に分らせることであるという意見が出されました。またリスク対策の選択では保有の概念が重要であるが、法律的な対応が求められているレベルはクリアする事が前提である。そして、リスクマネジメントの発展には積極的に保有したということを明示することが必須であるが、そのことが訴訟の際には不利になる可能性がある現在の日本の司法の判断が問題ではないかなど活発な意見が交換されました。

今回は2002年1月30日水曜日18時30分から、会場は新東京法律事務所（赤坂）です。

## オピニオン

リスクマネジメントシステム研究会の議論に参加して

アメリカでは1977年に地震災害低減措置法が創られカリフォルニア州の地震対策が始められた。その頃の日本では南関東地震という巨大地震を前提にした地震対策が主に理学・工学系の先生によって検討されていた。しかしロサン

ゼルス市では発生頻度の高い中規模の直下の地震を前提とし、それぞれの部局の危機管理として地震対策の検討を始めて

いた。そうすれば社会の広い範囲の人々の参加が可能になり、行政組織にとっても企業にとっても有意義だと考え、そ

れぞれの組織に地震時の危機管理の案を提出するように命じた。それは行政でも企業でも組織運営の中心人物がやらね

ば成らない仕事であった。危機管理対応力のある組織をいかに構築して置くかが、リスクマネジメントそのものだと

言う考え方である。ロス市のトム・ブラッドレイ市長はそのためあらゆる関係者を集め、それぞれの組織の危機管理計

画を提出させ、全員でブレインストーミングを行い毎年何回かシンポジウムやいろいろな会合を開いていた。そして実地訓練もおこなっていた。私は何回かの集まりに参加したが、彼らは一人一人のスキルを磨くこととヒューマン

ネットワークを構築することを重点的にやっていた。そのためには中核になる州の専門官が変わらないことにも配慮していた。このような環境があることが議論の前提では無かるうか。

会員 村上 處直（防災都市計画研究所名誉所長）

## ARIMASS 広報・編集委員会が発足しました

編集委員長・常任幹事  
辻 純一郎

第一回総会で承認されました編集委員会が発足しました。

編集委員は、小生のほか、畑谷圭一（副委員長）、河路武志、島 吉裕、竹澤史江、田端 進、鳥飼重和、中村陽子、村山知生、藪 孝雄の各氏です。第一回編集委員会には、樋口副会長が、第二回編集委員会には徳谷会長が出席され、大所高所からのご意見を頂きました。

当面の業務は、研究発表「応募テーマ」の事前評価・仕訳（常任理事会提出前段階）、ARIMASS 研究年報の原稿査読・編集、ARIMASS Letter 内容の企画立案、広報活動などとなります（もっとも ARIMASS Letter は事務局の菊池さんが編集発行の労を取って頂いているので、その前段階の業務となります）。教育実践分科会など他の分科会との連携を強化すると共に、広報・啓発・リクルート活動も併せて行う予定です。

総会に向けての日程は、'01,11/30 論文要旨締め 論文審査委員会審査 採否決定 採用論文執筆者に論文作成要綱を添え、連絡 '02,2/28 論文提出締め 編集委員会にて校正その他作業 印刷を予定しております。年次総会（'02,5/25 in 桜美林大学）に向け、みなさまのご協力をお願い致します。

### 事務局からのお知らせ

#### 1. 分科会連絡先

第1分科会（教育実践）：世話人：後藤和廣

第2分科会（RMS）：世話人：指田朝久

第3分科会（情報交流）：世話人：鈴木敏正

## 2. 新入会員紹介

氏 名	所属機関・職 名
福田 潤	桜美林大学経営政策学部助教授
川上 昌直	福島大学経済学部助教授
望月 威佐	成蹊大学経済学部学生

## 3. 住所・所属等変更の連絡方法

会員各位の自宅のご住所・電話番号・所属機関の名称・所在・電話番号・職名等について変更の生じた場合には、変更前と変更後を並記のうえ、必ず文書にて事務局宛ご連絡ください。

発行 危機管理システム研究学会

〒221-0052 横浜市神奈川区栄町 1-19-403

. 045-440-6778 FAX. 045-440-6777

e-mail : [arimass@muh.biglobe.ne.jp](mailto:arimass@muh.biglobe.ne.jp)

<http://www5b.biglobe.ne.jp/~arimass/>

2001年12月22日発行

印刷 株式会社 櫻 栄 .03-3288-5571